

"Lekeitiok de Mikel Laboa en CD" (Texto de Pekotxa
el Soudomino de Kazuko Ueno)

海外ニュース NOTICIAS MUNDIALES

バスクの大御所ミケル・ラボアの2枚組LP、初CD化

ミケル・ラボア (Mikel Laboa) は1934年生まれたから、今年ですでに73歳になる。健康状態があまり思わしくなく、現在自宅で休養中だ。ステージに顔を出すのもごく稀である。最近のステージ、といっても2006年7月11日のことだが、サン・セバスティアンで行われた平和コンサートメインにボブ・ディランが出演し、ミケル・ラボアが第一部で歌ったことがある (本誌06年9月号海外ニュース)。実に5年ぶりのステージであった

が、約40分間、ゆっくりと独特のヴォーカルでラボアの世界を満喫させてくれた。ひよっとしてこれが最後のステージとなるかも知れないという予感がないわけでもなかった。

そんな折、嬉しいことに2枚組のアルバムが届いた。タイトルは『レケイティオアック (Lekeitiok)』。バスクのレーベル・エルカルからリリースされたものだ。

ミケル・ラボアの音楽には、(バスクの伝統歌) オリジナル曲としてアパンギヤルド的な実験曲、の3つの柱がある。歌い始めた1960年代にはスペイン側ではあまり知られていなかったフランス・バスクの素晴らしい伝統歌を次から次へと取り上げ、淡々と歌うラボアの声と美しいメロディが見事にマッチして壮大なバスク抒情詩を作り上げた。

65年頃より、アルツエ、レテ、アチャガ、サリオナンディアなど、バスクの現代詩人の詩に曲をつけたオリジナル曲を歌いだした。バスクの国民唱歌、いや伝統歌となった感のある有名な「チヨリア・チヨリ (鳥は鳥)」はアルツエの詩にラボアが曲をつけたものである。

そして、69年頃から(アパンギヤルド的な実験曲) が試みられた。レケイティオアック・シリーズがスタートしたのである。ここでは、もちろん歌詞の意味も重要だが、それだけでなくそれとは切り離れた単なる音の響き、そして叫びも加えるなど、遊び心を存分に発揮して既成の音楽に対する実験を行った。このシリーズの名前、レケイティオアックというのは、実際にバスク北部海岸沿いに存在する小さな町、レケイティオの複数形だ。スペイン内戦が終わるまで、幼少であったミケル・ラボアが家族とともに疎開した場所でもある。

このほりリリースされた本盤『レケイティオアック (Lekeitiok)』は基本的に88年に同名で出た2枚組LPの収録曲がもたっているが、これまでCD化されなかったものである。



待望のCD化『レケイティオアック』

この中で代表的な「バガビガ・イカ」と「ゲルニカ」には幾つかのバージョンが用意されている。70年代に録音した素朴なバージョン、99年盤の「ゲルニカ・スセネアン」のオーケストラをバックにしたバージョンである。バガ・ビガ・イカ」ではインストゥルメンタル・バージョンも収録されている。ミケル・ラボアの世界を知るにははまたとないアルバムである。

(スペイン) ● pekotxa

from ESPAÑA

from PORTUGAL

初の「アフリカ研究図書館」とアフリカ関連出版物の増加

12月13日、ポルトガルで最初の「アフリカ研究図書館」の創設が発表された。これは2005年に始まったプロジェクトで、CEARISCTE (労働企業科学インスティテュート) の中に設置され、アフリカに関する社会科学・人文科学関係の図書1万冊でスタートする。

EU委員会からの資金的支援 (35万ユーロ) もあるが、ポルト大学、リスボン大学さらにエヴォラ大学のアフリカ研究センターも、この図書館設立にかかわっており、ジオルジ・サンバイオ元大統領の決断で大統領府図書館からの寄贈もある。

ポルトガルはかつて植民地支配の歴史があったにも拘らず、アフリカの現実について知らなすぎる。それは元ポルトガル領だった諸国であれ、他の諸国についてであれ同様である。と同プロジェクトのコーディネーター責任者、マヌエル・ジョアン・ハモス氏は語っている。

当面は紙(本)ベースの図書館となるが、近々のうちに「デジタル図書館」を立ち上げ、世界中どこからでもインターネットで図書館のデータにアクセスできるようにしたい、とのことである。

それと、偶々並行するかたちで、アフリカ関連書籍の企画、出版が増加してきている。

1966年創立のAtentamento出版社は、かつてギニア・ビサウの生んだ革命運動家ミルカル・カブラルの著作群などを出してきたところであるが、ポルトガルの近現代史がアフリカと密接に関係してきたのであるから、これまで以上に社会科学分野を

主体としてアフリカ関連の本を出しつつづける」と発表している。

一方、Caminho出版社は、今ポルトガル語圏で注目を浴びているモザンビークの作家ミア・コウトの新作や、アンゴラ作家ルアンディーノ・ウイエイラの作品を出版する予定である。また、かつての植民地戦争に参加した元兵士による回想録や小説も最近多くなっている。

モザンビークの作家ミア・コウト



「アフリカ植民地についてのトラウマがかつてはあったが、それは一部エリート層の問題であって、それからはフリーな新しい世代の作家たちによってアフリカについてのお話、歴史が書かれてきている」とのことであり、様々な視点からの文学作品が生み出されているといっている。

独立から30年以上経過した元ポルトガル領アフリカ諸国(アンゴラ、モザンビーク、ギニア・ビサウ、カボヴェルデなど) からポルトガルへ働きに流入している人たちの数は50万人以上となっており、こうした移民層も読者となってきたという出版社のソロバン動も当然あるだろうが、こうした出版動向は注目し値する。

こうしてアフリカ研究図書館が創設され、アフリカ関連の本が尚一層本屋に並び、これはポルトガルにおけるアフリカ再発見・再評価といえるかも知れない。

(ポルトガル) ● 亜名紀進